

釧路湿原自然再生協議会 再生普及小委員会
第17回湿原学習のための学校支援ワーキンググループ議事要旨

■日時：2023年7月28日（金）14:00～16:00

■場所：釧路地方合同庁舎4階 第三会議室

■出席者：（敬称略・順不同）

<専門家>

- ・高橋 忠一（再生普及小委員会委員長）
- ・境 智洋（北海道教育大学釧路校 教授）

<学校教員>

- ・釧路市立中央小学校 山本 翔太
- ・釧路市立新陽小学校 柴田 康吉、大澤 純平
- ・釧路町立別保小学校 田中 有香、平田 龍一郎
- ・釧路町立富原小学校 武石 圭司
- ・標茶町立標茶小学校 中村 健一
- ・鶴居村立幌呂中学校 長谷 泰昌

<学校教育行政機関等>

- ・釧路市教育委員会 学校教育部 教育支援課 指導主事 柴田 題寛
- ・釧路町教育委員会 教育部 指導主事室 室長 國井 彩子
- ・標茶町教育委員会 指導室 指導室長 富樫 慎也
- ・釧路湿原国立公園連絡協議会 事務局員 和田 強、佐藤 英樹
- ・釧路市子ども遊学館 事務局長 小笠原 忍

<ワーキンググループ事務局>

- ・環境省北海道地方環境事務所 釧路自然環境事務所 境 耕平
- ・公益財団法人北海道環境財団 内山 到、山本 泰志、安田 智子

■議事次第：

1. 開会
2. ワーキンググループの取組報告
3. 今後の取り組みについて
4. 閉会

■議事概要

1. 開会

《配布資料確認、委員自己紹介》

2. ワーキンググループの取組報告

事務局より資料1について説明。各取り組みに関係する委員から補足の発言を得ながら、意見交換を行った。オンラインでの学習のフォローアップに関して委員より質問があり、先生と情報交換しながら学習状況に応じて臨機応変に対応していくことを説明。

《委員からの補足》

○学外での発表の場づくり

- ・参加児童、来館者にも大変好評で、偶然来館された方も大変関心高くご覧になっていた。自信に満ちて発表する子どもたちの姿を多くの方々に見て頂くことができたことは、遊学館で開催した意味があったと思っている。
- ・ボリュームや方向性を検討しながら、毎年ブラッシュアップして継続して企画していけたらと考えている。
- ・積極的に他校の児童に質問をし、質問の質も次第に上がっていく様子があった。子どもたちが成長している様子が大変良くわかり、自身にも、子どもたちにも良い機会になった。
- ・様々な学校、学年の子の発表を聞き互いに刺激し合っていた。長く取り組んできた学校と、チャレンジ的に取り組んできた学校との良い意味での交流や刺激のし合いになっていた。

○フィールド学習のコーディネート

- ・考える余地を与えてもらいながら自分たちで見つけていく進め方をさせていただいたので、自分たちでも探し、見つけて、相談しながらやっていく姿が印象的だった。次回に向けて子どもたちの意欲を切らさないように進めていけたらと思う。
- ・事前にフィールドで説明を受け、子どもたちにもそれを元に話をすることができた。実際に湿原に行ってみて水に焦点を当てた視点が出てきたことが今回の大きな変化だった。視点が変わらない子に関しては、どのように発展させていくかが課題。今後、どのようにオンラインでのフォローを活用していけるのかを知りたい。
- ・フィールドで実感を伴って理解していっていることが感じられた。やる気を持続したまま、記憶を保ったまま発表にたどりつけるかというところで、組み立てが大事だと思っている。
- ・実際に行ってみることで、いろんな発見があり、子どもたち自身の視野がとても広がった。教員が説明する部分についても事前のフィールドで説明があったので、問題なく実施できた。
- ・7月の中旬におこなったカヌー体験では、変化に注目しながら楽しんでいた。9月のフィールド学習では、変化を感じながら、課題と仮説を立て、課題解決に向けた計画作りまでいきたいと考えている。どうすれば子どもたちが自発的に学習し進んでいくのかという手立てを本日お話が聞ければと考えている。
- ・理科の授業で体験2時間、前後4時間の中でおこなっているが、総合を意識し、情動を伴った経験を連続して行わせてあげたいと考え、中学1、2年生でおこなっている。小規模校のメリットとして、なかなか入りにくいフィールドまで連れて行ってもらうことができる。人、もの、ことをつながり意識し、案内いただいた新庄さん、故郷の自然、これらとの関わりとしてラムサール条約を関連付け、道徳の時間も使って学習している。サポートしながらとりまとめを進めたが、新庄さんとの質疑の繰り返しの中で深めることができた。全体としての課題として、総合まで有機的につなげられる系統性を持っていない。英語科や社会科と連携すれば深められると感じる。同じ鶴居村内の下幌呂小学校もやっているの、小中での学習が上手くつながっていければと思う。

○教員研修講座

- ・多くの参加があり、今回のテーマに非常に関心が高まってきていることを実感した。ソーラーパネルに対するこれまでの価値観が覆るような、大変価値がある講座となった。一步踏み込むとすると、教材化してモデルケースとして提案できれば、先生方ももう一步踏み込みやすくなるのではないかと感じた。

《委員からの意見》

○学習を進めるにあたっての課題

- ・フィールドで見たことを学習にどう結び付けていくのかが課題。自分が立てた課題について子どもたちなりに仮説を立て結論を出すまでに、どう接していったら良いか個人的には悩むことが多い。
- ・協力いただける団体とつながっていきながら、やりとりを重ねることで、子どもたちが自分で課題を解決すること、地元の良さや釧路の強みについて知識や愛情を持つということにつながると感じるが、持続可能な形で進めていける方法を模索していくことが課題。
- ・児童と先生と一緒に悩みながら答えを見つけていく過程が大切で、わからないままにしておくのではなく、オンラインの力を借りて専門家に聞くこともでき、そこが一つの動機になる。
- ・大人が知っている知識を子どもたちに伝える側面と、取組む学校が広がってきている中で、次の世代の子どもたち同士が交流する場があると良い。時代毎に価値は動くもので、今までの考えを踏まえつつ子どもたち自身で見つけていかななくてはいけない。調べる力や考える力も必要だが、子どもたち同士で深めていけているんだと実感が持てる場があると良い。
- ・子どもたちの目的意識として、自分たちが知りたい、やりたいではなく、こちらから与えているようになっていくと感じる。5年生の取組みが校内であまり広まっておらず、パネル展や発表会について4年生の段階から知っておけば、ここに出て発表できる、私もやってみたい、知りたいというようにつながっていく。学校側での発信の部分もあると思うが、そのへんを強化していくと、子どもたちもより湿原学習に意欲的になっていくと感じた。
- ・次年度になると新しい先生、新しい子どもたちとなり、毎回更地になってしまう。やってきたこと、対応いただいたことを少しずつ蓄積していくと、学校内にある資料が増えていく。引き継いでいくということが、我々教師含めて必要だと感じる。
- ・小中連携の話をしている中で、いろいろと重なる場所があり、中学校と連携していけると良い。
- ・5年生がどのような過程で取組んでいるかということが学校全体として共有されていない。学習を始める最初に去年の6年生に発表してもらい、ただインターネットで調べてまとめるでは終わらないということ子どもたちにも実際に感じてもらえた。今の5年生の役割は4年生につないでいくことだと感じており、5年生がどうつないでいくかということが、子どもたちと私の役割だと思う。昨年度学習した今の6年生が調べ方やまとめ方をアドバイスするように5年生に関わったり、自分たちがまとめたものを下の学年に伝えて、全校的に発信していくのも全校で共有できる手当と感じる。

○課題を受けての意見

- ・学習発表会で5年生の発表を4年生が聞き来年は自分たちがこれをやるんだという意識を強く持っていたように思う。今年、6年生に対して発表しアドバイスをもらう機会を持てればと考えており、高学年というところにつながっていくと思う。
- ・1回の体験の中で気づきや動機、課題意識を先生側で視点として持ち、子どもが気づいた時に如何にアプローチできるのかということがとても大事だと思うが、難しいと思いながらやっている。探求的に学ばせたいし、学び続ける子どもたちを育てたいと強く思っているが、最初の動機のなぜやるのかという部分はとても難しいと自分も思っている。幌呂中学校では2

年生でもやるので、来年何をやりたいかということをもとめさせ、それを課題として来年どのような実験をしたら良いのか考えることを昨年度は行った。自己調整的な学びと被ってくと思うので、ふりかえりと総合的にも使えると思う。

- ・自分で課題を見つけて仮説を立てて行うことは、大人になってもやっていることで、自分なりに形にしていくプロセスが子どもたちにとっては将来的に効いてくるという印象がある。
- ・オオジシギは夏にこちらに居て、冬にオーストラリアに行く。その鳥は湿地がなければ生きていけない。地域だけの教育も素晴らしいが、そうした切り口で、このような小さい鳥がオーストラリアとつながっているといったアプローチの教育も今後できたら面白いと思う。
- ・標茶小学校では、毎年、課題がどんどん変わっていくことと、探求のプロセスをきちんと学んでいっている。それが毎年継続されているということはすごいことだと思う。おそらく先生方の中でも交流がされていて、子どもから質問された時にそういう対応が取れるように伝わっているのではないかと自分は思っている。また、普段の授業の中で探求的な授業を意識されているのではないかと思う。

○釧路湿原サイエンスフェアについて

- ・子どもたちがどういった学習に取り組んできたのかということをしっかり理解した上で開催できたことが大きかった。遊学館の役割として、発表の場もそうであるが、地域の方々が学校の現場に直接ということが難しいところを私たちが担ってコネクティングしていくという作業をおこなっていければ、もっと応援したいと言ってくれる事業者や人が増えていくことで盛り上がるかと思っている。
- ・もっと沢山の子どもたちに発表してもらいたいと思っているが、会場が手狭だった。発表があることを知らない来館者が偶然見かけて興味を持って見ていただくという点では、遊学館は最適の場所なので、何か方策を立てて続けていただけたらと思う。

○湿原を題材とした探求学習について

- ・昨年の中央小学校と標茶小学校の探求の課題とプロセスを抜き出してとりまとめた。両校ともに子どもたちに疑問を投げかけ、そこから先生が課題を抽出していった課題を探求するという流れでつくっている。大きな違いはやり方、調べ方で、先生達と一緒に上手く引き出している。先生がどれだけ開放していて子どもの意見を取りながら一緒に探求できるのかということが大事だということがわかってきた。
- ・中央小学校と標茶小学校では、湿原に行ってから課題を出させたが、新陽小学校では、湿原に行く前に課題を出させた。そうすると、それしか見なくなってしまう。去年やってみてわかったのは、行く事によって子どもたちがいろいろなものを見ながら見出していった疑問を大事にして、先生との対話の中で課題を見出していくと、良い探求課題を見つけることができるということが見えてきた。
- ・どの様にやったら良いのかということは今まさに先生方が試行錯誤されている。これからデータが蓄積されれば、この様に湿原を扱くと子どもたちが探求のプロセスを踏み、良い課題を見つけ、探求をやっていくことができるということが見えてくる。そうした意味で、この場で交流しながらやっていき、湿原サイエンスフェアで子どもの様子を見てもらうことによって、こうやれば良いということが、今後どんどん高まっていくのではないかなと思っている。良いプロセスができてきたなと思う。
- ・大きな課題は中学校だと思う。中学校で湿原を題材とした探求はなかなかやらない。そこをこじ開けたいと思う。そうすると、湖陵や江南などの高校につながっていく探求のプロセスができ上がるだろうなど。大事なことは、子どもたちの学びをどう生かしてあげるか、学びのプロセスをどう学んでいくかということ。湿原を使うことは探求課題を見出す部分にすごい価値があるのではないかと自分は思い始めた。学校で探求課題が見つからないという時には、湿原に連れて行くと課題を見出していく探求ができるのではないかと、まだまだ情報が

足りないが、そういった仮説も立つようになってきた。これを価値としてぜひ見出してみたい。課題を見出すには湿原に行けば良いということは一つの価値だと思う。

- ・課題の交流が小中でできればまた面白いと思う。湿原を使うと本当に面白い課題が見つかってくると思っている。先生方をお願いがあるが、子どもたちから出てきた最初の疑問について、ぜひコピーして送っていただきたい。それがどの様に変化していくのか、その中で先生方に還元していければと思っている。プロセスをぜひ記録しておいていただけたらと思う。

3. 今後の取り組みについて

事務局より説明後、今後の取組に対する意見交換を行った。

《教育委員会、専門家、座長からの意見》

- ・釧路市でも総合に関わっていく窓口を一本化していくと良いと考えてはいる。この場でこのようにやっていきますという話はできないが、同じ課題がある。市民参加という部分では、学校が主体でやっていることをコミュニティースクールが中心になっていくと、関わる人が増えていき広がりが見えてくるのではないかというイメージを持った。
- ・如何にどの子にも平等に学習の機会を与えられるかという意味では、教育委員会の担う役割はとても大きく、各学校のやっていることが互いにわからないということがあるので、まずは教育委員会が町内の学校に周知する。そして、どの先生がその学年を持った時でも同じような学習の深まりがある学習が成立していけるかということがポイントだと思っている。教育課程がまずしっかりしていること、各学校で誰につながればその学習の支援が受けられるかということ各学校がわかっていることが必要で、わかっているという部分は教育委員会の役目だと思う。釧路町に限定すれば、様々な授業の支援を社会教育課と教育支援課教育支援係が窓口になって、いろんな方を紹介している。学校とつなぐような役割をしているので、このWGや協力いただける方々を紹介していけるとなったら、とてもありがたい。いろいろな学校に広げていけるように、この機会を使って力を貸していただきたい。
- ・学校の先生、教育委員会の方、環境省の担当者と、持ち場や役割は何年かするたびに代わっていくが、代わっていくことで一人でも多くの方が何かの形で釧路湿原というものに関わる意識を少しずつ共有しながら、そういう人が少しずつ増えていくことが可能なのではないかと思う。全体を支えるような形というかシステムという言葉が良く使われるが、極端に言えば、私はそこにその地域に住んでいる市民が湿原に対して持つ眼差し、これが大事なものだということを理解し、感じるという素地がない限りは駄目だと思っている。
- ・それぞれの教育委員会や、町や市が越えなければならないこと、予算の部分もあるが、釧路湿原という教材が大きな可能性を秘めていると感じている。持続可能な状況にするために教育委員会もこのWGも進めていかなければならない。学校としても、どこにどう相談して良いかわからないという状況にあるので、そうした支援という部分も一つ環境にはなると思う。
- ・標茶町では全ての児童がカヌー体験を行うが、カリキュラムマネジメントの中で、教科横断的な視点の中でカヌー体験をそこに位置付けて、子どもたちの新たな課題や追究を進めていけば、標茶小は5年生で湿原の学習を終えても私は良いと思う。6年生で新たな課題が出てくると思う。町として、他の学校にどのように支援できるか、標茶小学校の5年生がこのような活動をしているということを知らせるということが教育委員会の役割と感じている。町ではアドベンチャースクールというものを社会教育課の方でやっているが、その活動の中で湿原のことも加えていくと、学校の教育活動外のことはあるが、子どもたちの参加も増えてくれば、地域に根差した学習の一つになるのではないかと思う。町としてこういうことをするとは言えないが、いろいろな方に意見を聞きながら可能性を探っていければと思う。
- ・主体という言葉がいろんな意味にとられると思うが、学校のカリキュラムの中で先生が主体なので、学校の方でこういう子どもたちを作りたいんだと、そういう時にこういう人たちを呼びたいんだということに学校に関わりながらやっていくという姿を作っていくって欲しいと

願っている。例えば、宗谷管内では全ての学校に防災担当者がいて、4月に教育局が主体となって、气象台や消防、警察など全員が顔を出して、学校がこういうことをやりたいと言うと、气象台、消防、警察が出来ることをプレゼンする。それを聞いて学校側はこういうことをやりたいと相談することができる。このWGの取組みでも、上手くつながって行って、学校と団体が一同に会して顔を合わせる場がどこかであったら良いなと自分は思う。その中で小学校が互いにつながったり、環境省などの組織や団体が出来ると言うてあげたり、そういう場が将来的にできて、お互いがWin-Winの関係でもっているような会ができれば良いなど。そこで研修をやったり、学校の発表を聞いたり、地域の学びを伝え合うとか、それがフォーラムであってもコンソーシアムという形でも良いし、そんなものができるの良いなと思っている。そうすると、いろんな学校の顔が見えてくる。まずは町毎でも良いと思う。将来的には釧路管内全体でできれば良いと思うし、その中で遊学館さんのようなところが出てきて全体で発表してみようとなると、釧路全体でもって環境の力を磨けていけないのではないかな。将来の夢であるが、そのようなことができれば良いなと思う。

《事務局からの補足》

- ・子どもたちにとって湿原が魅力的であると同時に、先生方にとって湿原が学習教材として魅力的に映ることが大切。教える立場でどこが面白かったかといった蓄積があると今後につながっていくのではないかな。環境省や別の機関ができるサポートを伝える場を模索できればと思う。また、画一的にならず、それぞれの学校の良さを伸ばしていけるような、平等性と個性や多様性の部分とを上手くバランスをとりながらいければと思う。
- ・学校で何かしたいということを共有する場が対面で持てれば良いが、皆さんお忙しいので、年に1回の対面の場ではなく、1カ月に1回などの頻度でオンラインの場を設けてみるということでも良いと考えている。小さいところから初めて、その中でこういうことをやっていきたいという学校をフォローしていくであったり、上手くいくところ、上手くいかないところを考えていけたら良いのではないかなと思う。先生方の中でも広まってもらえたらと思うし、学校外の主体にも同様に広がっていけば良いなというイメージを持っている。
- ・情報を蓄積して、やろうとしている人が参照できることが必要と考えている。子どもたちの反応も見られるようにすると、どういう意味があるのかもわかるようになる。そういうものが、釧路湿原を取り巻く環境の中でできてくればと思う。

《教員からの意見》

- ・こんなことに困っている、だからこうしてほしいということが気軽に相談できると良い。
- ・本来は一同に会している方とお会いできるのが良いと思うが、チャットほど密でなくとも良いので、緩いやり取りの場がネット上であり、年に1回、2回、本気でやりたい人がオンラインのミーティングやフォーラムなど、緩いつながりを持ちつつ、本気でやりたい人が集まれるというような、何段階かに分けて行えると良い。
- ・人とつながるといいうところでも価値を見出せると思う。あるNPOや博物館に質問が集中して、疲弊してしまうという話も聞いており、お互いがWin-Winな状態とはどういう状態なのかということも検討しなければならない。函館の高校では、総合の探求と絡めて上手く実践するというのもできているので、そのあたりも勉強して出せるようになっておきたいと思う。

4. 閉会